

編集後記

『国文学試論』第二十七号をお届けします。今年度も国文学研究室の伝統である『試論』を受け継ぎ、刊行できたことは嬉しい限りです。

今回、私自身がレトリックについて論文を書くにあたり、言葉にこめられた意味、思いを更に深く考える機会を得ました。同時に、いかに自分の思いを伝えることの難しさについても考えさせられました。

昨年、各種メディア等で「やさしい日本語」という言葉を耳にされた方も多いのではないかと思います。「やさしい日本語」は、「普通の日本語よりも簡単で、外国人にわかりやすい日本語」を指します。具体的には「簡易な表現を用いる、文の構造を簡単にする、漢字にルビをふる」等です。誕生の背景には地震国である日本の事情があります。この「やさしい日本語」は、災害時、日本語に不慣れた外国人に正しい情報が迅速に伝わることを目的として始まりました。現在では、二〇二〇年に開催される東京オリンピックの訪日外国人にと活用、活躍の場は徐々に広がり、認知されています。私は「やさしい日本語」を考えることは、外国人だけでなく日本人にとっても大きな利点があると考えています。なぜなら、もう一度、わかりやすく伝わる日本語とは何か、を振り返る機会になるからです。私たち国文学専攻の院生は、日本語に日々多く接しています。ですが、我が身を振り返ると、本当に自分は相手に伝わる言葉や行為を発しているのだろうかと不安になるのです。これを機に、私自身も、もう一度深く考えてみたいと思います。

最後になりますが、今号の刊行に際して厳しくも温かくご指導いただきました先生方、ご支援くださった大学職員の方々、印刷会社の方々に心より御礼申し上げます。

（草木）

国文学試論〈第二十七号〉

二〇一八年二月二十一日 印刷

二〇一八年二月二十八日 発行

編集兼 東京都豊島区西巣鴨三―二〇―一

発行所 大正大学大学院文学研究科

国文学研究室内

印刷所 東京都豊島区東池袋五―四九―六

株式会社 白峰社

電話 〇三(三九八三)二三一二番